



TITLE:

<書評>天野正輝編 『教育評価論の
歴史と現代的課題』

AUTHOR(S):

岩崎, 紀子

CITATION:

岩崎, 紀子. <書評>天野正輝編 『教育評価論の歴史と現代的課題』 . 教育方法の探究 2003, 6: 82-84

ISSUE DATE:

2003-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/190273>

RIGHT:

天野正輝編『教育評価論の歴史と現代的課題』

岩 崎 紀 子

1. はじめに

国立教育政策研究所が発表した「評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料——評価規準、評価方法等の研究開発（報告）」(2002.2)は、新学習指導要領に基づく「教育の成果」を適切に評価するにあたっての基本的な枠組みを提示することによって、教育現場における日常的な評価研究を促した。1990年代以降、「改革」の波に晒された教育現場では学習者個人の評価のみならず、学校の評価、教員の評価（教員の人事考課制度）など「評価」をめぐる諸問題が学校教育の問題全体と深く連動して山積している。

学校がこれまでにない危機的状況に瀕している昨今、「評価」の問題がそれだけ混迷の度合いを増していることも当然のなりゆきである。こうした事態にあるからこそ、「評価」にかかわる原理的・歴史的アプローチから近代公教育における「評価」のあり方を考察し、さらに諸外国との比較を通して教育実践の直面する「評価」の問題を鋭く分析していく「教育評価論」研究が今求められているのであり、今日の教育方法学は「評価」をめぐるこの混迷の内実を明らかにしていく責務を負っているといっていよい。

2. 本書の意義

本書は、2002年3月をもって京都大学大学院教育学研究科を定年退官された天野正輝氏と、氏の指導を受けた11名の研究者らが、わが国の「教育評価」にまつわる諸課題を、試験制度や職業指導、教育測定論、教育目標論、保育論、学力低下論などの多岐にわたる領域から鋭く描き出した、氏の退官記念論集である。「教育評価論」研究のメッカとして長きにわたる伝統と研究実績をもつ同研

究科の教育課程講座（現・教育方法講座）では「研究課題はあくまでも院生・学生自身が設定し、教官は研究としての水準を高める立場から、批判的にコメントしつつ指導する」という学風をもつ。執筆者の顔ぶれをみると、同じ「道場」で育ったとはいえ、実に多彩な研究専門領域の第一線で活躍する研究者らの「個性」が生きる構成である。執筆者らから遅れること十数年、同講座で育った評者が恐れ多くも本書を評するということにはかなりの勇気が必要とする、読み応えのある論集であることは言うまでもない。

天野氏の問題意識の原点は「子どもの発達を正確に診断・測定し、評価すること」を教師の専門的力量の中核としてとらえ、教育評価活動が実践（教授・訓育活動）の改善にどのようにかわり得てきたのかという観点から、実践活動における教師の「評価行為の自覚化」の過程を、教授法史や教育方法史、教育実践史を辿るなかで明らかにしていこうとするところにある（天野：1993）。氏の教育評価史研究は、子どもを観る教師の目の確かさが主体的・計画的・反省的な教育実践の創造の基盤となること、さらに「個々の児童を学習の主体、発達の主体と認め、その発達可能性を顕在化させる教育活動に内在し、その活動をより合理的・科学的なものにしていく」ことに「評価」行為の本質があると指摘する。学習主体としての子どもの学習を保障し、反省的实践者としての教師の教育実践を常に評価の対象に位置づけることを「教育評価」論研究の意義として打ち出した氏の功績は大きい。

本書全編に底流するのは、「評価」をめぐる多大な課題を抱える閉塞した教育現場の混迷に対しての、現状打開に大きな一歩となる斬新な問題

提起であり、子どもの自律的な学びと教師の反省的な教えを豊かに意味づける「評価」のあり方と、子どもにとって意味ある教育実践の創造を展望する刺激的な著作である。

3. 本書の構成と本書へのコメント

本書の構成は以下の通りである（執筆者は敬称略）。

はじめに

第1章 教育評価史研究の意義と課題（天野正輝）

第2章 19世紀後期日本の小学校における生徒集団の区分原理（山根俊喜）

第3章 倉橋惣三の保育論における保育評価の手掛かり（児玉衣子）

第4章 教育測定法の開発と職業指導の転回－田中寛一における教育測定と職業指導の関連を中心に－（玉村公二彦）

第5章 近代中国における教育測定運動（長谷川豊）

第6章 現代化論を再考する－到達目標論の視点から－（岸本実）

第7章 試験の形態と学力の質－イギリスの一般中等教育資格試験（GCSE）の歴史の場合－（鋒山泰弘）

第8章 体育の授業で子どもたちは何を学ぶのか－イギリスの体育のナショナル・カリキュラムにおける到達目標と学習評価基準の検討－（木原成一郎）

第9章 米国におけるポートフォリオ評価法の実践－クロー・アイランド小学校の事例を中心に－（西岡加名恵）

第10章 数学学力低下論の検討－学力・アチーブメント・学習－（松下佳代）

第11章 義務教育制度の変容と「学力低下」論争（山崎雄介）

第12章 教育的鑑識眼研究序説－自律的な学びのために－（松下良平）

あとがき（田中耕治）

（付・天野正輝先生略歴・著作目録）

紙数の関係上、評者の独断により四論考を取り上げ、若干の感想を述べるにとどまることをご容赦いただきたい。

編者でもある天野正輝氏（第1章）は氏のライフワークである戦前の初等教育段階での評価活動と評価観をレビューし、とりわけ学期以降の評価活動が指導法改善の内在的契機となりえてきたかという観点から厳密な史料批判に基づく史的考察をおこなっている。

松下佳代氏（第10章）は、大学生の学力低下の危機を発端に近年話題を集めている「学力低下論争」の構図を、「学力低下現象」は事実か否かを問う視点から算数・数学の学力データを事例にとり、実証的・批判的に鋭く分析している。特に、上述の学力論争が展開されている土俵自体の曖昧さを追及し、「学んだ力」と「学ぶ力」という図式で論じられる＜2つの学力＞論にまつわる論争の不毛性を指摘する。「学力」を「学習活動」との関係でとらえなおすという氏の斬新なアイデアは、「学習活動によって獲得した力」としての＜学んだ力＞と、「学習活動をつくりあげていく力」としての＜学ぶ力＞とを結びつける学習活動のあり方をさぐる研究の方向性を示しており、特筆すべきである。学力の形成と発揮にかかわる学習活動を想定し、その構造とプロセスから「学力」の再定義を試みることで学力論研究の新たな地平を拓いたといえよう。

一方、山崎雄介氏（第11章）は、戦後の「学力モデル」をめぐる論争を紐解きながら、昨今の「学力低下批判」にまつわって、近年の政策的対応としての「全国的・総合的な学力調査」や学習指導要領の「最低基準化」、さらに学力向上フロンティアスクールやスーパーハイスクールなどの学校体系の複線化を批判的に検討し、くわえて、こうした政策動向の一方で、90年代半ば以降の「教育改革」に対して、学校外での教育の正統化を求める動きを代表する民間（保護者）側のホーム

スクーリングなど「義務教育縮小化論」の台頭を取り上げ、経済的合理性を志向する近年の教育改革を「社会がその年少の構成員に対してどのような能力や資質を期待するのか」という角度から「学力」を再検討する必要性を指摘する点は注目に値する。

松下良平氏（第12章）の革新的な論考は、本書全体を締めくくるという位置づけではなく、近代学校において「教育（学習）目標がなければ教育も学習も成り立たない」とする自明の前提をこそ疑う必要があるとの問題意識に立っている。近代

公教育の産物としての「学習」ではなく、伝統的な社会において日々の実践の中でおこなわれてきた「学び」に着目し、その特徴として「教育目標なき学び」の原理を明らかにすることによって、その「学び」を支える〈鑑識眼にもとづく教育評価〉の基本的な枠組みを提示することを試みている。「教育的鑑識眼」研究が本来の「学び」の復権をもたらすものとして、従前の「教育評価」研究に一石を投じている点は大変興味深い。

（晃洋書房、2002年、228頁、2,900円）

（福島大学教育学部講師）